

九州地方の調査に基づく 男女学生間における身体意識の比較

上野 智子, 山本 昭子, 島田 直子, 和佐野 仁代

(福岡女子大学人間環境学部)

原稿受付平成 16 年 4 月 14 日; 原稿受理平成 17 年 4 月 18 日

A Comparison between Japanese Male and Female Students of the Kyushu Area Based on an Investigation Concerning Body Shape Consciousness

Tomoko UENO, Akiko YAMAMOTO, Naoko SHIMADA and Hitoyo WASANO

Faculty of Human Environmental Science, Fukuoka Women's University, Fukuoka 813-8529

Concerning the consciousness of body shape of Japanese students in the Kyushu area, an investigation was made on 598 males and 557 females ranging in age from 18 to 29 from the viewpoint of differences between the sexes. The results were as follows: 1) The degree of satisfaction with their own body proportions is lower in females than in males. The principal body parts with which over 50% of subjects are dissatisfied are body height, upper limb girth and bust girth in males, and all the body parts in females. 2) Males and females differ on what constitutes the ideal female body shape. Females desire leaner bodies than males desire for them. 3) According to correlation analysis, the regression lines of the ideal body weight to ideal height show a bias toward leanness in females, while the regression line for males is centrally situated in the normal range based on BMI.

(Received April 14, 2004; Accepted in revised form April 18, 2005)

Keywords: male student 男子学生, female student 女子学生, somatotype 体型, consciousness 意識, self-assessed body shape 自己認識体型, ideal body shape 理想体型.

1. 緒 言

ヒトの身体に対する意識は、国、民族、時代、世代、性別などにより異なり、また、環境によっても変化する。例えば、食糧の乏しい、あるいは逆に豊かな時代や地域とではそれらの意識は自ずと異なったものとなる。理想とする身体像は服飾の流行とも密接な関係が認められる。西洋の服装史を例にとると、ウエストの極端に細い服が流行すると、コルセットを使って細いウエストの身体が作られ、また、ハイウエストのシュミーズ・ドレス（19世紀初頭、仏、帝政期）やバスルスタイル（オーバースカートを腰部背面で束ねたS字型シルエットの服、19世紀後半）、チューブライン（20世紀初頭）など流行のシルエットが変遷すると、身体的理想像もまた変遷し、コルセットやつめものを用いて流行に適合した身体が理想像として作り上げられた。女性に比して男子服は20世紀までにほぼ標準

化され、肩の形と幅、ジャケットの長さ、ラベルの形、ズボンの幅などに変化は見られるものの、女子服ほど極端な流行の変遷やそれに伴う人工的な身体の歪曲などはほとんど認められない。

カイザー¹⁾はその著書『被服と身体装飾の社会心理学』のなかで、“人は自分の身体をどうみるか、そこには身体的、社会的、心理的な要因が働く。身体像や身体的魅力についての社会における基準によって、人は自分の身体像を持ち、それに満足したり不満を覚えたりするものである。それがまた、被服の好みや態度に大きな役割を果たす”と述べている。自己の身体に対する現状認識と身体的理想像を明らかにすることは、自己を他の人にどうアピールしたいかという潜在的欲求を顕在化させ、それは自己アピールの重要な手段の一つである被服のトレンドにも関与する。

身体意識に関する主な報告には、栄養や健康上の視

Table 1. Means and standard deviations for age, body height, weight and BMI of subjects

	Age		Height		Weight		BMI* ¹	
	Mean±SD (year)	<i>n</i>	Mean±SD (cm)	<i>n</i>	Mean±SD (kg)	<i>n</i>	Mean±SD	<i>n</i>
Male	20.9±1.5	554	171.7±7.8	593	62.2±7.8	591	21.1±2.4	591
Female	20.9±1.3	519	158.0±5.1	551	49.3±5.4	485	19.7±1.9	485

*¹ BMI=Body weight (kg)/height (m)².

点からの理想体型の追究²⁾, 衣服設計上の立場からみた肥り痩せの意識調査³⁾, 体つきの意識と生活行動⁴⁾⁵⁾, ライフスタイルや行動パターンと若年女性の身体状況との関連性を探ったもの⁶⁾, 若年層女子の痩せ願望の程度を明らかにしようとしたもの⁷⁾⁸⁾, などがあげられる。また, ファッション関連産業による世界の主要 12 都市の若い女性の体型, ライフスタイル, 生活意識に関する国際比較を目的にした調査なども報告されている⁹⁾。身体に対する意識形成の背景には, 異性にどう見られたいかという男女相互の意識が深く関わっているのではないかとする説も少なくないが, 従来の身体意識に関する調査研究対象はその多くが若い女性のみであり, それらの説は推測の域を出ていない。男女を対象とした調査は小・中学生および高校生を対象とした報告¹⁰⁾や国外の報告¹¹⁾があるのみで, わが国において成人を対象としたものはほとんど見うけられない。本研究では, 身体に対する意識のありようは, 自己アピールの重要な手段である被服のトレンドにも関与しているという観点から, 自己の身体的アピールの潜在的欲求を顕在化するため, 若い世代の男女を対象として, 身体に対する自己認識, 理想体型, 理想に近づくための行動, 異性に対する好みの体型などを調査し, 男女の身体意識を両者の差異に重点をおいて明らかにしようとした。

2. 調査対象および調査方法

九州地方の専門学校, 短期大学, 大学および大学院に在籍する 18 歳以上 30 歳未満の男女学生を調査対象として, 平成 14 年 10~11 月に, 無記名の質問紙調査を面前記入法または配布回収法により行った。回収率は, 男子 80% (598/748 人), 女子 98% (557/568 人)であった。調査項目を以下に示す。

- ① 年齢, 身長, 体重 (全て自己申告)
- ② 自己の体型および身体各部寸法に対して満足して

いるか否か (不満足の場合には, サイズをプラスにしたいかマイナスにしたいかを選択)。

③ 自己認識体型および理想体型 (やせ型, 標準体型, 筋肉質型, 太り型から選択)。

④ 異性に対する好みの体型 (③と同様の体型および特になしから選択)。

⑤ 身長および体重の理想値

⑥ 体型維持または理想体型を目指して行っていること (回答し易くするため, 予想される回答 13 項目を設定し, 実行経験および継続の有無を記入させた。集計時に内容別に 4 カテゴリーに分類してまとめた)。

なお, 未記入者は回答数として扱わず, 特に断らない限り原則として, その項目ごとの回答数を 100%として表した。

Table 1 に調査対象の年齢, 身長, 体重およびそれらから算出された BMI の平均値と標準偏差値を示す。また Table 2 に体型維持または理想体型を目指して行っていることについての質問 13 項目および 4 カテゴリーを示す。

調査対象の出生地は九州地方が最も多く (男 80%, 女子 83%), 県別では福岡県 (男子 42%, 女子 45%), 長崎県 (男子 13%, 女子 20%), その他の県 (男子 25%, 女子 18%) である。なお, 無回答の者は男子 13%, 女子 10%である。

身長, 体重および BMI の平均値を平成 12 年度国民栄養調査¹²⁾による全国平均 (20~29 歳の身長・体重・BMI: 男子 171.0 cm・65.5 kg・22.4, 女子 157.9 cm・51.1 kg・20.5) と比較すると, 男子の身長が有意に高く ($p<0.05$), 体重および BMI は男女ともに有意に小さいという結果を得た ($p<0.01$)。今回の調査サンプルは, 男子は全国平均に比べて平均身長が高く, 平均体重が軽い。また, 女子は平均体重が軽いといえる。これらのことは, 真にそうなのか, あるいは身長および体重が自己申告値であることによるのか明らか

九州地方の調査に基づく男女学生間における身体意識の比較

Table 2. Classified questionnaire items into categories

Item	Category
1 Nothing	
2 Doing sports	
3 Walking	
4 Jogging	Exercise
5 Muscle training	
6 Intermittent fasting	
7 Medicine, tea, etc. for diet	Diet food or pills
8 Continual ingestion of diet food	
9 Limitation of calories	
10 Taking supplements	Healthy eating habits
11 Abstaining from snacks	
12 Keeping a regular life style	Regular life style
13 Massage, sauna, etc.	and others

Multiple answers.

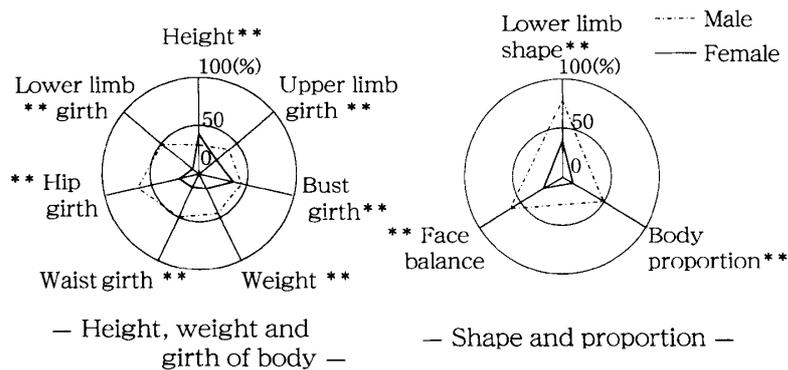


Fig. 1. Ratio of subjects satisfied with their own body shape

** $p < 0.01$: Significance differences between the sexes.

ではない。高校生を対象とした調査において、体重を実測値よりも過小に申告する傾向が認められたという報告があり¹³⁾、本調査においてもその可能性は否定できない。しかし、大都市の居住者の方が痩身の割合が高いという報告もあり⁶⁾¹⁴⁾、今回の結果がそれらのいずれに該当するかは不明である。

3. 結果および考察

(1) 自己の体型に対する満足度

自己の身体各部の寸法とプロポーションに対して満足している者の割合を Fig. 1 に示す。

1) 身体各部に対する満足度

満足度の高い順に身体部位を挙げると、男子では、

腰囲 66%，下肢囲 50%，腹囲 48%，胸囲 46%，体重 44%，上肢囲 40%，身長 30% であり、女子では、身長 42%，胸囲 37%，上肢囲 23%，腰囲 22%，体重 17%，腹囲 15%，下肢囲 9% となる。女子は全ての項目において 50% を下回り、身長以外では男子より満足する割合が低く、特に体重や上半身および下半身の周囲長に関する項目の満足度が低い傾向がみられる ($p < 0.01$)。

2) プロポーションに対する満足度

男子では、下肢の形態 78%，顔のバランス 62%，全体のプロポーション 49% の満足度であるのに対し、女子では、下肢の形態 37%，顔のバランス 23%，全体のプロポーション 12% と全て男子に比べて満足度

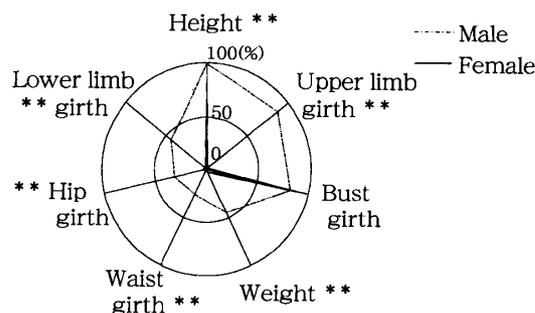


Fig. 2. Ratio of subjects desiring to increase their own body size

** $p < 0.01$: Significance differences between the sexes.

が著しく低い ($p < 0.01$). これらの結果は Cohn ら¹¹⁾の「男子より女子の方が身体不満度が高い」という報告と一致している。また、2001年に(株)ワコールが行った調査⁹⁾において、日本人女子は欧米に比べて体型満足度が低いことが報告されているが、その原因は明らかにされていない。これは、日本人女子の身体理想像が背が高くやせ型、バストが大きめの西洋型身体理想像に近いことによるのではないだろうか。

更に、身体各部について不満足と回答した者のうち、サイズや体重をプラスにしたいと回答した、増志向者の割合を Fig. 2 に示す。

50%以上の増志向項目は、男子では身長 (411/415人, 99%), 上肢囲 (315/358人, 88%) および胸囲 (268/321人, 83%) の3項目であり、女子では身長 (269/323人, 83%) および胸囲 (311/352人, 88%) の2項目である。また、全ての項目について、男子では増志向者がいるが、女子では身長、胸囲の2項目以外には増志向者がほとんどいない。自己の身体に不満を有する者のうち、男子の約80%以上は身長が高く胸囲や上肢が大きくなることを望み、女子の約80%以上は身長が高く胸囲が大きくなることを望んでいるといえる。

(2) 自己認識体型と理想体型の性差

自己認識体型と理想体型を男女別に比較したグラフを Fig. 3 に示す。自己認識と理想体型いずれにも各体型間の比率に有意な性差が認められる ($p < 0.01$)。

1) 自己認識体型について

男子では標準体型 (38%) とやせ型 (33%) で71%を占めるのに対して、女子では標準体型 (53%) と太り型 (27%) で80%を占めている。男子は女子に比べて、標準体型と認識する者が少なく、その分やせ型と認識する者が多い傾向を示している。女子は男子

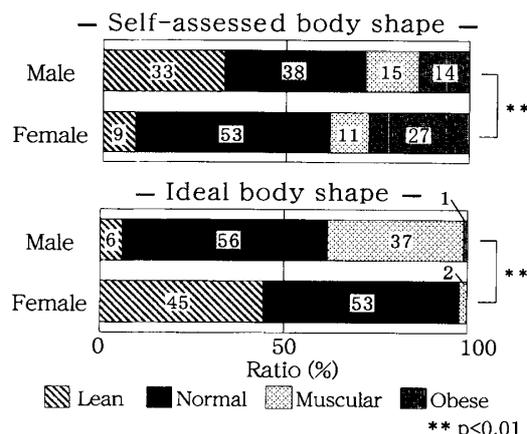


Fig. 3. Differences between the sexes in self-assessed shapes and ideal body shapes

に比べて、標準体型と認識する者が多く、やせ型認識者が顕著に少ない。その分太り型認識者が多い傾向がみられる。先述したように、今回の調査サンプルのBMI平均値は男女とも全国平均に比べて有意に低いが、女子に比べて男子のみにやせ型が多いとはいえず、以上の結果は男女間の実態の差異ではなく男女間の認識の差異に基づくものと考察される。

2) 理想体型について

男子では標準体型 (56%) と筋肉質型 (37%) で93%を占めるのに対して、女子では標準体型 (53%) とやせ型 (45%) で98%を占めている。標準体型を理想とする者の男女差はあまり認められないが、筋肉質型とやせ型の志向傾向に男女の差異が明らかに示されているといえる。

(3) 男女別理想体型と異性の好む体型との比較

Fig. 4 に、先に (3)-2) で述べた男女別理想体型と異性の好む体型との比較を示した。

男女ともに、理想体型と異性の好む体型の各比率間に有意差が認められる ($p < 0.01$)。男子自身の理想体型と男子に対する女子の好みの体型は、両者とも標準体型の比率が最も高い (男子理想56%, 女子の好み52%) 点では一致するが、両者の差異はやせ型 (男子理想6%, 女子の好み11%) と筋肉質型 (男子理想37%, 女子の好み28%) にみられる。すなわち、男子では筋肉質型を理想とする者の比率が女子の好みより高く、やせ型を理想とする者の比率が低い。

女子自身の理想体型と女子に対する男子の好みの体型は、両者とも標準体型の比率が最も高い (女子理想53%, 男子の好み67%) 点では男子の場合と同様であるが、標準体型を好む男子の比率の方が高い。また、

九州地方の調査に基づく男女学生間における身体意識の比較

両者の差異はやせ型（女子理想 45%，男子の好み 20%）に顕著にみられ，女子ではやせ型を理想とする者の比率が男子の好みより高い．以上をまとめると，自分自身の理想体型と異性の好み体型とのギャップは男子よりも女子の方に大きい．特に，女子のやせ型志向は男子の好みよりも顕著に高い傾向が認められる．また，この傾向は，女子自身に対する程ではないが，異性の体型に対する好みにも反映されている．

今回の調査結果をみると，自分自身の理想体型と異性の好みとは必ずしも一致せず，異性の好みの影響はないとはいえないが，女性のやせ志向については，直接的に反映しているとはいえないと考察される．男子の筋肉質志向もまた同様のことがいえる．

(4) BMI 別にみた自己認識体型

今まで述べてきた自己の体型に対する認識は回答者個々の主観に基づいている．日本肥満学会の基準¹²⁾では，BMI 18.5 未満をやせ，18.5~25 未満を普通，25 以上を肥満と定めており，男女とも 20 歳以上で 22 を標準としている．今回はこれらの基準を客観的基準値

として用い，回答者の BMI と自己認識体型とにどの程度のギャップがみられるかを比較してみた (Table 3)．ただし，ここでは筋肉質型を標準体型と同等に扱った．Table 3 の網かけ部分は BMI と自己認識が一致している者であるが，男子の約 65%，女子の約 60% が一致しており，男子の一致度が有意に高い ($p < 0.05$)．一致していない者 (男子約 35%，女子約 40%) のうち，男子では，BMI は普通であるのにやせ型と認識とする者が 24%，逆に太り型と認識する者が 9% である，女子では，BMI がやせであるのに標準体型と認識する者が 15%，また，BMI が普通であるのに太り型と認識する者が 22% である．これらの結果からみて，男子は自己の体重を過小に認識し，女子は過大に認識する傾向が認められた．若年層女子が自己の体重を過大に認識する傾向は，Takasaki ら⁷⁾ や福永ら⁸⁾ も指摘しており，今回の結果と一致する．

(5) 理想身長と理想体重

1) 現在の身長 (自己申告値) と理想身長との相関
現在の身長 (以下身長と記す) と理想身長間には，男女ともに 1% 水準で相関が認められた (男子 $r = 0.56$ ，女子 $r = 0.60$)．そこで実際はどの程度の身長増減を理想としているかを調べるため，「理想身長と身長との差」について検討を行った．身長と「理想身長と身長との差」間には 1% 水準で有意な相関が認められる (男子 $r = -0.56$ ，女子 $r = -0.58$)．「理想身長 - 身長」値と身長の散布図，および「理想身長と身長との差」を目的変数 (Y)，身長を説明変数 (X) とした回帰直線を Fig. 5 に示す．傾きは男女ではほぼ平行であり，理想値との差が 0 となる身長，すなわち，理想と現状が一致する身長は男子で 181.1 cm，女子で 163.4 cm となる．自己の身長によって理想身長は異なるが，身長が理想と現状の一致点より大きくてもあるいは小さくても理想値との差の絶対値は同様に大きくなる．

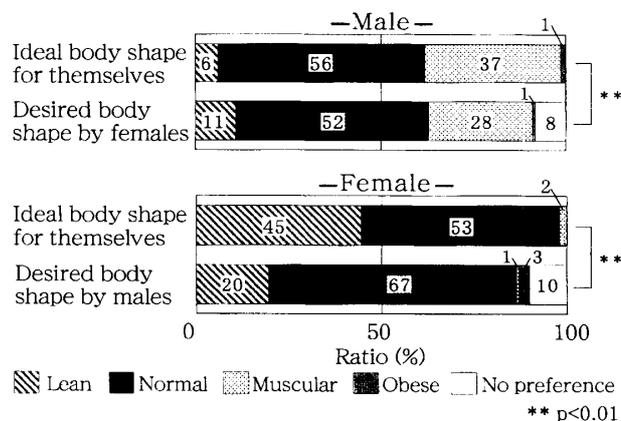


Fig. 4. Comparison of ideal body shapes by each sex and preference of opposite sex

Table 3. Actual BMI of subjects in each classified body shape by self-assessment

Self-assessed body shape	Lean		Normal		Muscular		Obese		Total	
	Male % (n)	Female % (n)								
Under 18.5	10 (57)	9 (44)	1 (8)	15 (73)	0 (0)	2 (7)	0 (0)	1 (4)	11 (65)	27 (128)
18.5-25	24 (139)	1 (4)	37 (216)	40 (188)	13 (77)	9 (44)	9 (50)	22 (103)	83 (482)	71 (339)
Over 25	0 (0)	0 (0)	0 (1)	0 (1)	1 (8)	0 (0)	5 (28)	1 (7)	6 (37)	2 (8)
Total	34 (196)	10 (48)	38 (225)	55 (262)	14 (85)	11 (51)	14 (78)	24 (114)	100 (584)	100 (475)

網かけ: The subjects who assessed own body shape correspond with actual BMI. Criteria of Japanese Society of Obesity: BMI = under 18.5, Lean; 18.5-25, Normal (including Muscular); over 25, Obese.

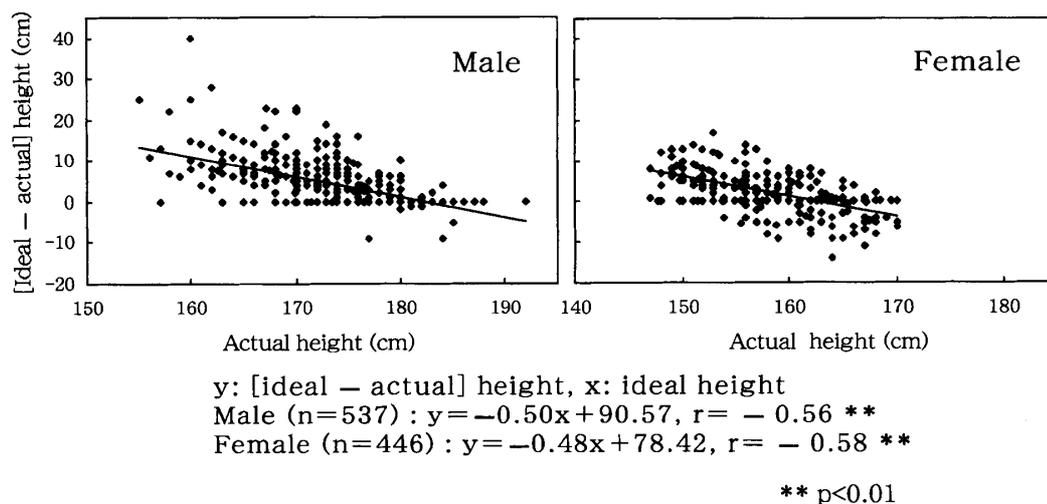


Fig. 5. Regression lines of [ideal—actual] height to actual height

理想値との差を回帰式により算出すると、男子の平均身長 171.7 cm では +4.7 cm、女子の平均身長 158.0 cm では +2.6 cm となる。

2) 理想身長と理想体重との相関

回答された理想身長と理想体重間には男女ともに 1%水準で有意な相関が認められる (男子 $r=0.60$, 女子 $r=0.54$)。理想身長と体重の散布図および理想体重を目的変数 (Y), 理想身長を説明変数 (X) とした回帰直線を Fig. 6 に示す。また、これらの回帰直線と比較するため BMI 基準によるやせと肥満の境界線を図中に示した。理想とする身長、体重の平均値・標準偏差は男子では身長 176.9 ± 5.0 cm, 体重 64.3 ± 7.7 kg であり、女子では身長 160.3 ± 4.3 cm, 体重 46.3 ± 3.7 kg である。男子の回帰直線は、理想身長約 170 cm 以下では BMI 基準で普通とやせの境界線に近づくが、それ以上では普通の範囲のほぼ中央を通る。女子は普通とやせのほぼ境界線上にあり、理想身長約 150 cm 以上ではやせの範囲を通過しており、男子に比べて女子のやせ志向がここでも顕著にみられる。女子では理想身長が高くなるほど BMI が低くなる傾向を示している。

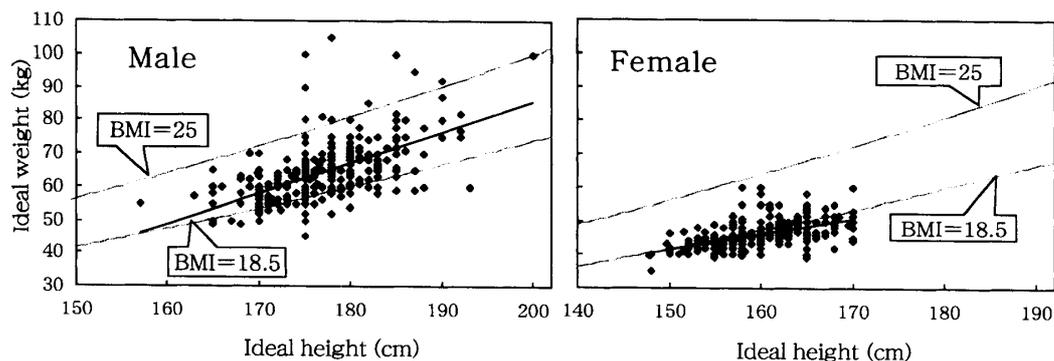
以上をまとめると、自己の身長によって理想身長は異なるが、身長が理想と現状の一致点より離れるほど「理想身長と身長之差」の絶対値が大きくなる。つまり身長が大きくてもあるいは小さくても理想値との差の絶対値は同様に大きくなる。また、男子は BMI 基準で普通の体重を理想としているのに対し、女子はやせの体重を理想とする傾向が明らかである。

以上、3.-(2)~(6)において、男女の身体意識を幾つ

かに分けて見てきたが、それらを総合して男女を比較すると、(1) 自己の身体の満足度は男子より女子の方が低い、(2) 男子の身体的理想は標準体型か筋肉質型が大勢を占め、高い身長と太い胸囲・上肢を望んでいるのに対して、女子のそれは標準体型かやせ型であり、高い身長と大きめの胸囲を望んでいる、(3) 自己の理想体型と異性の好む体型は必ずしも一致せず、そのギャップは男子よりも女子の方が大きい、(4) 自己の体重を男子は過小に、女子は過大に評価する傾向がある、(5) 自己の身長によって理想身長は異なるが、身長が理想と現状の一致点 (男子で 181.1 cm, 女子で 163.4 cm) を離れるほど「理想身長と身長之差」の絶対値が大きくなる、(6) 理想体重を身長との関係 (BMI 基準) でみると、男子は普通体型の体重を理想としているのに対し、女子はやせ型の体重を理想とする傾向がある。などのことが明らかになった。

日本の伝統的的衣服 (和服) が日常着であった時代には、特に女子の場合、背が高くバストの大きいことは衣服を魅力的にせず、むしろ小柄なズンドウ型をよしとした。しかし、日常着の洋装化は西欧型体型、すなわち背が高く、バストが大きくウエストが細い凹凸のある身体シルエットをよしとする美意識の変化を生んだ。日本の若年層女子がやせ願望・スリム志向をもつ傾向^{3)~5)7)8)}は、1970年代あたりから目立ちはじめ¹⁵⁾。それは戦後の復興もなり、衣食の充足など生活基盤が一応整い、若者の関心が遊びやファッションに向かう余裕が出来てきた時期と重なる。当時世界的に流行したミニスカートにおける理想的身体像はモデルの“ツイギー”であり、文字通り小枝のようなほっそ

九州地方の調査に基づく男女学生間における身体意識の比較



y: ideal weight, x: ideal height

Male (n=537) : $y=0.90x-94.10$, $r=0.60$ **

Female (n=446) : $y=0.46x-27.26$, $r=0.54$ **

** $p<0.01$

Fig. 6. Regression lines of ideal weight to ideal height

りした身体が理想とされた。現在のファッション界における西欧型身体理想像はスーパーモデルに象徴されるように、背が高く手足が長くやせている事である。西欧型体型は日本人と比べ、やせていてもある程度のバストサイズは保持されているのが特徴である。今回の結果をみると、女性の場合、背が高く痩せ型、大きめの胸囲志向はまさにそれらファッション界における西欧型理想像を志向しているとみることができる。

一方、男子の場合についてみると、男性のファッションは20世紀以降大きな変化がなく、身体理想像に対する流行の影響もさして大きくはないとみられる。

Kagan¹⁶⁾は“背が高く、筋肉質の体格は、基本的な男性型の特性であり、女性の好みに拘わらず男子はそういう体型になりたいと思っている”と述べている。また、背の高い男性は低い人よりも魅力的だと思われており、背の高さはその人の特性や能力の評価に影響を与える傾向があるとする報告もある^{17)~19)}。日本人男性についてのそれら社会心理学的研究報告例は見あたらないが、日米の意識に大きな差異がないとすると、今回の男子の“高い身長と筋肉質”志向は基本的男性型志向に基づく身体意識の現れとみることができる。我が国における近年の生活環境や栄養状態の改善に伴う体位の向上などが、自己の身体に対する満足感が女子より高くなっている理由ではないだろうか。

今回の調査結果をみると、自分自身の理想体型と異性の好みとは必ずしも一致せず、そのギャップは男子よりも女子の方に大きい。異性の好みの影響はないとはいえないが、女性のやせ志向については、直接的に

反映しているとはいえない。女性が経済力を持たず、自立できない男性依存社会や時代には、理想的身体像は男性の好みと一致する必要があった。現代における女性の高学歴化、経済力、地位の向上は、男性依存から女性を解放し、男性の好みによる束縛からも多くの女性の意識を解放したといえるのではないかと。現代女性には男性の目よりファッション意識を優先させる傾向がより強いのではないかと考察される。

(6) 体型維持または理想体型に近づくための行動

1) 行動の種類とそれらの経験および継続状況

体型維持または理想体型に近づくための行動の種類とそれらの経験および継続状況についての結果を次に述べる。回答し易くするため、予想される回答13項目を設定し回答させたが、集計時に、Table 2に示すように、類似した内容別に4カテゴリーに分類した。4つのカテゴリー別に行動の実行経験者と、継続者の男女別比率をFig. 7に示す。

男子では全てのカテゴリー間に有意差が認められ ($p<0.01$)、「運動」78%、「健康的食生活」25%、「規則正しい生活・その他」19%、「ダイエット食・薬の摂取」9%の順位となっており、「運動」経験者が最も多い。女子では「運動」65%、「健康的食生活」51%、「規則正しい生活・その他」49%、「ダイエット食・薬の摂取」21%で、男子と同じ順位であるが、「健康的食生活」と「規則正しい生活・その他」間には有意な差は認められない。男女を比較すると、4カテゴリー全てにおいて男女間に有意な差が認められ ($p<0.01$)、「運動」のみは男子の比率が高いがその他では、女子

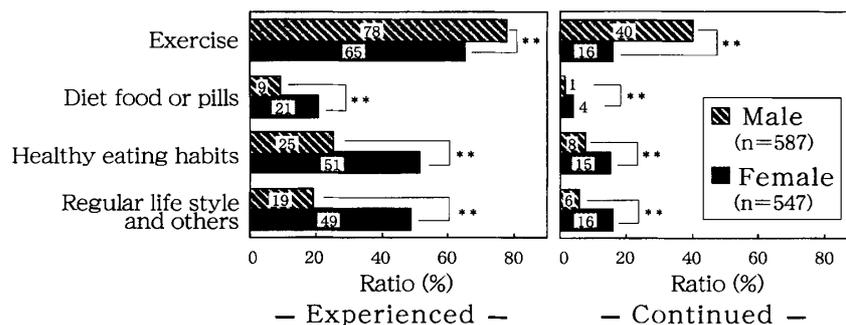


Fig. 7. Ratio of subjects who experienced and/or continued the action in each category

** $p < 0.01$: Significance differences between the sexes.

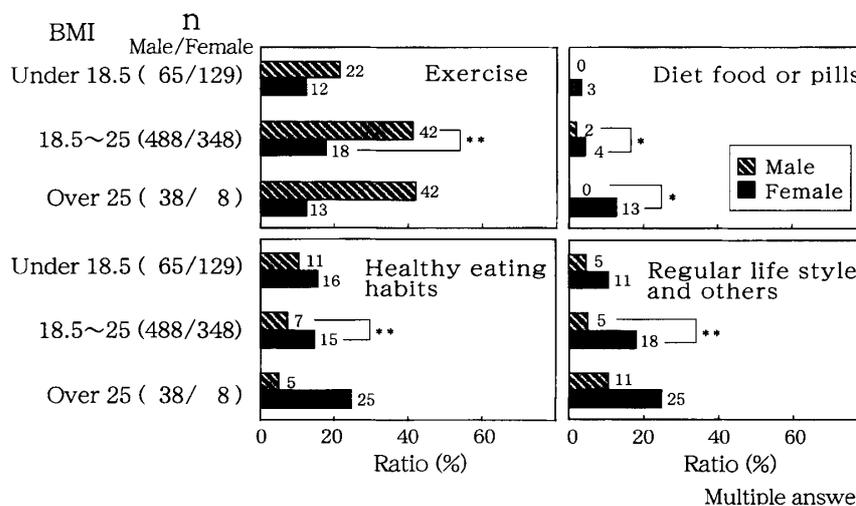


Fig. 8. Ratio of subjects who continued each action in each BMI class

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$: Significance differences between the sexes. Number of subjects in each BMI class is regarded as 100%.

の比率が高くなっている。つまり、男子の行動は「運動」中心であるのに対して、女子の行動は多岐にわたる傾向がみられる。

何らかの行動を実行経験してもそれらが継続されているとは限らない。現在にわたる継続者こそ真の実践者とみなすことが出来る。継続者比率はどのカテゴリーにおいても、男女とも減少しているが、男女間の比率には全て有意差が認められる ($p < 0.01$)。男子では健康的食生活と規則正しい生活・その他間を除く全てのカテゴリー間に有意差が認められ ($p < 0.01$)、「運動」40%、「健康的食生活」8%、「規則正しい生活・その他」6%、「ダイエット食・薬の摂取」1%の順位で、「運動」継続者の比率が最も高い。女子では「ダイエット食・薬の摂取」4%が他のカテゴリー（運動16%、

規則正しい生活・その他16%、健康的食生活15%）に比べて継続比率が低くなっている ($p < 0.01$)。体型維持または理想の体型に近づくための行動として、男子は女子に比べて「運動」を実行実践し、継続する比率が比較的高いのに対して、女子では実行する行動が多岐にわたり、経験率が高い割には継続率が低い傾向がみられる。

2) BMI別にみた各カテゴリー行動の実践者比率

BMIを基準として、やせ、普通、肥満の体型別にみた各カテゴリーの行動実践者（継続者）の比率をFig. 8に示す。男子では、「運動」において、BMIが18.5未満者と18.5以上の者の実践比率に有意な差が認められ ($p < 0.05$)、やせ (BMI 18.5未満) の「運動」実践比率が低い。また、5%水準以上での有意な

九州地方の調査に基づく男女学生間における身体意識の比較

差異は認められなかったものの、女子では「運動」以外のカテゴリーでは、BMIが高いほど実践者比率が高い傾向がみられるのに対して、男子では「健康的食生活」では逆にBMIが高いほど実践比率が低い傾向がみられる。

以上述べてきたことをまとめると、体型維持または理想体型に近づくための行動として、男子は女子に比べて「運動」を実践する比率が高く、BMIが高いほど実践率が上がる傾向を示す。また、女子は行動の種類が多岐にわたり、いずれも男子よりも経験率が高い割には継続率が低い、男子と同様BMIが高いほど実践率が上がる傾向を示す。

カイザー²⁰⁾は『被服と身体装飾の社会心理学』のなかで、ルドフスキー (Bernard Rudofsky, 1971) の“人は自分の身体に基本的には満足していないのではないか”との言を引いて、不満足感が向上しようと努力させ、またファッションを定期的に変えている動機となっていることを示唆している。今回の結果をみると、男女とも、BMIが高いほど何らかの行動の実践率が高く、それらは必ずしもすべて継続されてはいなくても、身体的満足感を得るために努力する傾向がうかがわれた。

以上のことから、今回の調査結果は以下のように結論づけられる。すなわち、若い女性は自身の身体について、背が高くやせ型、大きめの胸囲志向を持っており、それらの意識は現在のファッション界における西欧型理想像に根ざしている。また、男性は背が高く筋肉質志向であり、それらの意識は時代やファッションによる影響というより基本的な男性嗜好の体型特性である。男女各々の身体志向は、異性の好みの影響よりも、自らの意志によることが大きい。また、男女ともに体型維持または理想体型に近づくため、継続率は低いながらも何らかの努力をしている傾向にある。

4. まとめ

九州地方の男子学生 598 人および女子学生 557 人の身体意識を調査し、両者を比較対照することにより性差を検討したが、結果は以下の通りである。

(1) 全般に男子に比べ女子の方が身体満足度が低い。身体に不満を有する者のうち、男子の約 80% 以上は高い身長と大きめの胸囲や上肢を望み、女子の約 80% 以上は高い身長と大きめの胸囲を望んでいる。

(2) 理想体型について、男子では標準体型 (56%) と筋肉質型 (37%) で 93% を占めるのに対して、女

子では標準体型 (53%) とやせ型 (45%) で 98% を占め、筋肉質型とやせ型の志向傾向に性差が認められる。

(3) 自己の理想体型と異性の好み体型とのギャップは男子よりも女子の方に大きい。特に、女子のやせ型志向は男子の好みよりも顕著に高い傾向が認められる。また、この傾向は、女子自身に対する程ではないが、異性の体型に対する好みにも反映されている。

(4) BMI による日本肥満学会の基準に基づく体格評価と自己認識体型が不一致の者は女子の方に多く (男子約 35%, 女子約 40%), 自己の体重を男子は過小に、女子は過大に認識する傾向が認められる。

(5) 男女ともに、現在の身長と「理想身長と現身長との差」間には逆相関が認められ、現身長によって理想身長は異なるが、現身長が理想と現状の一致点 (男子で 181.1 cm, 女子で 163.4 cm) より離れるほど「理想身長と身長との差」の絶対値が大きくなる。また、理想身長と理想体重間には男女ともに相関が認められる。理想身長に対する理想体重の回帰直線を見ると、男子の回帰直線は BMI の「普通」の範囲のほぼ中央を通るが、女子は「普通」と「やせ」の境界線上にあり、男子に比べて女子のやせ志向が顕著にみられる。

(6) 体型維持または理想体型に近づくための行動として、男子は女子に比べて主に「運動」を実践する比率が高く、BMIが高いほど実践率が上がる傾向を示す。また、女子は行動の種類が「運動」の他、「規則正しい生活・その他」、「ダイエット食・薬の摂取」、「健康的食生活」、「規則正しい生活・その他」など多岐にわたり、いずれも男子よりも経験率が高い割には継続率が低く、BMIが高いほど実践率が高い傾向を示す。

本研究に際しご協力頂いた九州大学の佐藤陽彦教授・石橋圭太助手、福岡教育大学の福澤素子教授、長崎シーボルト大学の庄山茂子教授、九州産業大学の小泉隆助教授、並びに調査にご協力下さった学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) S・B・カイザー：『被服と身体装飾の社会心理学』、北大路書房、東京、67 (1994)
- 2) 江澤郁子：間違ったダイエットの骨への影響、家政誌、**52**, 1029-1034 (2001)
- 3) 植竹桃子：衣服設計の立場からみた肥り痩せの意識、家政誌、**39**, 711-723 (1988)

- 4) 岡田宣子：母と娘の体つきの意識—瘦身志向について—, 家政誌, **41**, 867-873 (1990)
- 5) 岡田宣子：体つきの意識と生活行動—女性の下着の衣生活を中心として—, 家政誌, **43**, 37-44 (1992)
- 6) 高宮裕子, 浅野牧茂：ライフスタイル・ストレス・行動パターンの関連性からみた若年女性の身体状況と地域性, 生理人類学会誌, **7**, 145-153 (2002)
- 7) Takasaki, Y., Fukuda, T., Watanabe, Y., Kurosawa, T., and Shigekawa, K.: Ideal Body Shape in Young Japanese Women and Assessment of Excessive Leanness Based on Allometry, *J. Physiol. Anthropol.*, **22** (2), 105-110 (2003)
- 8) 福永 茂, 小林慧歩：女子大生の体重意識, 学校保健研究, **35**, 396-404 (1993)
- 9) 株式会社ワコール：『World Women Now 世界女性のこころとからだ』, 東京, 京都, 5-57 (2002)
- 10) 植竹桃子, 松山谷子：児童・生徒における肥り痩せの意識, 家政誌, **45**, 83-91 (1994)
- 11) Cohn, L. D., Adler, N. E., Irwin, C. E., Jr., Millstein, S. G., Kegeles, S. M., and Stone, G.: Body-Figure Preferences in Male and Female Adolescents, *J. Abnorm. Psychol.*, **96** (3), 276-279 (1987)
- 12) 健康・栄養情報研究会(編)：『国民栄養の現状(平成12年国民栄養調査結果)』, 第一出版, 東京, 59-60 (2002)
- 13) 西沢義子, 木田和幸, 野田美保子, 齋藤久美子, 坂野晶司, 朝日茂樹, 三田禮造：身長, 体重の申告値と実測値の比較—中・高校生の場合—, 学校保健研究, **44**, 426-433 (2002)
- 14) 加藤育子, 富永祐民, 鈴木継美：肥満者および羸瘦者の特徴, 日本公衛誌, **35** (7), 342-348 (1988)
- 15) Guillen, E. O., and Barr, S. I.: Nutrition, Dieting, and Fitness Messages in a Magazine Adolescent Women, 1970-1990, *J. Adolesc. Health*, **15**, 464-472 (1994)
- 16) Kagan, G. R.: Acquisition and Significance of Sex Typing and Sex Role Identity, in *Review of Child Development Research* (ed. by Hoffman, M., and Hoffman, L.), Russell Sage, New York, Vol. 1, 137-167 (1964)
- 17) Dannenmaier, W. D., and Thumin, F. J.: Authority Status as a Factor in Perceptual Distortion of Size, *J. Soc. Psychol.*, **63** (2), 361-365 (1964)
- 18) Wilson, P. R.: Perceptual Distortion of Height as a Function of Ascribed Academic Status, *J. Soc. Psychol.*, **74**, 97-102 (1968)
- 19) Koulack, D., and Tuthill, J. A.: Height Perception: A Function of Social Distance, *Can. J. Behav. Sci.*, **4** (1), 50-53 (1972)
- 20) S・B・カイザー：『被服と身体装飾の社会心理学』, 北大路書房, 東京, 72-73 (1994)